二〇二一年度　群馬大学共同教育学部　学校推薦型選抜問題

国語専攻

小論文

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題用紙を開いてはいけません。
2. 問題用紙は表紙を含め３枚、解答用紙は１枚、下書用紙は１枚です。落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所があった場合には申し出てください。
3. 受験番号と氏名は全ての解答用紙の所定の欄に必ず記入してください。
4. 解答は指定の解答用紙に記入してください。
5. 解答用紙は持ち帰ってはいけません。
6. 問題用紙と下書用紙は持ち帰ってください。

国語専攻　小論文

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

昭和二十年以降、日本人の漢文レベルは、ますます低下した。

国語の教科書や、高校や大学の入学試験に「漢文」があるおかげで、漢文教育はかろうじて生き残った。しかし、日本人が読む漢詩文の量は劇的に減った。昭和四十七年（一九七二）の日中国交正常化のとき、日本全国で中国ブームがわきおこり、漢詩や漢文への興味が高まったこともあったが、大正時代以降、日本人の漢文的教養は、基本的に「消費財としての教養」となったまま、今日に至っている。

平成の日本でも、漢詩文を愛読する人々は、けっこういる。漢詩の作りかたを習う人さえいる。しかし、そうした人々が漢詩や漢文に求めるのは、おおむね、現代の忙しい生活で得られぬ安らぎである。

なかには「生産財としての教養」を漢文に求める人も、いないわけではない。しかし、それらの人々の関心も、例えば「孫子の兵法に学ぶ処世の知恵」といったノウハウ的な分野に限られる。

二十一世紀の今日、漢文的教養の潜在的必要性は、高まりつつある。例えば、江戸から明治にかけて、日本人の知識人は、豊かな漢文の素養を生かして、次々とセンスのよい新漢語*を考案した。ところが、昭和から平成にかけての日本人は、漢文の素養を失ってしまったため、新漢語が作れなくなってしまった。

一例をあげると、今日の日本人は、「パソコン」にあたる漢語さえ考案できず、中国人が考案した「電脳」を輸入して使っている。カタカナの外来語をなんでも新漢語に置き換えればよい、というわけではない。しかし今日の中国で、パソコンやインターネット関連の用語をどんどん「新漢語」に置き換え、自国民にわかりやすいものにしている様子を見ると、まるで明治期の日本のような勢いを感じる。

かつての日本の強みは、中流実務階級が優秀で勤勉であったことにあった。その中流実務階級は、江戸から明治にかけて、「生産財としての教養」として漢文をもっていた。ところが、今日の日本の中流実務階級は、かつての漢文のような強力な教養を、バックボーンとしてもっていない。幕末の若き志士たちは、出身階層や藩が違っても、漢詩漢文という共通の素養をもとに、国造りの理念について熱い議論をかわすことができた。しかし平成の若者が共通の教養としてもっているのは、マンガやアニメなどのサブカルチャーだけである。

＊新漢語…「科学」「進化」「経済」「自由」「権利」「民主主義」など、近代西洋の概念や文物を翻訳する過程で日本人が考案した漢語。

（加藤徹『漢文の素養　誰が日本文化をつくったのか？』、光文社新書、二〇〇六年、二二四―二二五頁）

問一　「漢文的教養」についての筆者の見解に対し、あなたの考えを述べなさい。（四〇〇字以内）

問二　カタカナの外来語を一つ挙げ、それに対して、あなたなりの新しい漢語を考案し、簡明に解説しなさい。